

負けず嫌いとスポーツ活動

西田 保*¹⁾ 佐々木万丈*²⁾ 北村 勝朗*³⁾

これまで体験的あるいは感覚的に捉えられていた「負けず嫌い」という慣用語に対して、スポーツとの関連で学術的に研究する意義が高まっている。そこで、本研究では、負けず嫌いの測定尺度を作成して信頼性および妥当性の検討を行い、その尺度を用いて負けず嫌いとスポーツ活動との関係を明らかにすることを目的とした。調査は、高校生667名（男子255名、女子412名、平均年齢16.2歳）を対象に実施された。調査内容は、対象者の属性（学年、年齢、性、スポーツ活動の経験など）、負けず嫌い、多面的競争心、達成動機、動機づけ（勉強、運動やスポーツ）であった。予備調査を経て、負けず嫌いの対象は「他者」と「自己」であること、それらの内容は「勝利希求、固執、悔しさ、リベンジ」であることが明確にされた。

探索的および確認的因子分析の結果、「自己に対する負けず嫌い」と「他者に対する負けず嫌い」の2つの下位尺度で構成される負けず嫌い尺度が作成された。信頼性に関するこれらの尺度の内的整合性（ α 係数）および安定性（再検査法）は、心理検査としておおむね満足できる水準にあった。また、負けず嫌い尺度は、多面的競争心、達成動機、動機づけ（勉強、運動やスポーツ）との間に妥当性を支持する相関関係を示したことから、信頼性と妥当性の両方を満たしていることが確認された。

対象者の属性に基づいて負けず嫌い尺度の得点を比較した結果、「他者に対する負けず嫌い」は、男子および上級学年の生徒において高いことが明らかとなった。また、運動部に所属している生徒、長期間スポーツ活動に取り組んでいる生徒、レギュラーの生徒は、両方の負けず嫌い得点とも高かった。これらの結果から、負けず嫌いがスポーツ活動に影響を及ぼしていること、また、これとは逆に、スポーツ活動の経験が負けず嫌いの形成に影響を与えている可能性が示唆された。

最後に、負けず嫌いに関わる今後の研究課題が示された。

キーワード：負けず嫌い、尺度作成、信頼性、妥当性、スポーツ活動

緒言

「負けず嫌い」という用語がある。デジタル大辞泉(2013)には、「他人に負けることを嫌う勝気な性質であること。また、そのさま。まげざらい。」と記載されている。日常生活場面に限らず、スポーツ場面においてもよく聞かれる言葉である。例えば、トップアスリートの敗戦後のインタビューでは、「いつも1番でいたいです」「負けるのは大嫌いです」「負けたら必ずリベンジします」「この悔しさは絶対忘れません」といったコメントが散見される。これらの言葉は、負けることを嫌う強い気持ちや負けた時のネガティブな感

情が、次の行動への強い動機づけを喚起し、アスリートの競技力を高めていることを示唆している。この視点に立てば、負けず嫌いは、トップアスリートになるための重要な心理的適性の1つであると考えられる。また、スポーツ活動を実践していく中で、負けず嫌いがどのように関わっているのか、どのようにして形成され育っていくのかなど、これまで体験的あるいは感覚的に捉えられていた負けず嫌いを学術的に研究する価値は大きいと言える。

負けず嫌いを動機づけの視点から考えると、心理学における従来の動機づけ研究においては、一般的に言えば、成功や勝利はうれしさや満足などのポジティブ

* 1) 愛知学院大学心身科学部健康科学科

* 2) 日本女子体育大学体育学部

* 3) 日本大学理工学部

(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: tamotsu@dpc.agu.ac.jp

な感情を生み高い動機づけに結びつくが、失敗や敗北は悲しみや悔しさなどのネガティブ感情を生みその後の動機づけは低くなるという因果関係が想定されているが、負けず嫌いの心理的特性からすると、必ずしもこのような関連性は認められない。負けず嫌いな人は、失敗後に悔しさや悲しさを感じたとしても、それらを基盤としてその後の行動への動機づけを高めていると考えられる。冒頭のインタビューで示した悔しさを背景にした強い動機づけの存在は、これまでの動機づけ研究に新たな方向性を示すものであり、この点においても負けず嫌いに関する研究の推進がより一層求められるところである。

さて、これまでの負けず嫌いに関連する研究として、渡辺・土井 (2007) は、小学生を対象に、負けず嫌いは「他者と比較して優位に立つこと」と「自己向上への強い志向性」から成り立つことを想定して研究を行った。そして、負けず嫌いの4つの因子（優位、賞賛、自己向上、くやしき）を抽出し、これらが小学生の友人関係に影響を与えていることを指摘した。また、負けず嫌いに近い概念として競争心 (competitiveness) を扱った太田 (2010, 2011) の研究では、その行動の意図まで含めた多面的な競争心を測定する尺度を作成し、負けず嫌いが勝利志向性に正の影響を及ぼしていることを明らかにした。いずれの研究ともスポーツ活動に焦点をおいて検討されたものではない。

これに対して、体育の授業を対象にした中須賀 (2012) の研究では、成績雰囲気 (performance climate) を強調した体育の授業が、自我志向性 (ego orientation) に正の影響を及ぼし、その自我志向性が負けず嫌いに正の影響を与えたことが報告されている。すなわち、勝つことや優れた成績が強調されると、他者との比較を通して達成することを重視する志向性が強くなり、その結果として負けず嫌いが強くなることが示された。また、スポーツに直接関係する負けず嫌いの取り組みとして、北村他 (2012) は、日本スポーツ心理学会において「負けず嫌いの意味を探る—負けず嫌いはトップアスリートの条件なのか?—」と題するラウンドテーブルディスカッション (RTD) を企画した。そこでは、負けず嫌いの概念、外向きと内向きの負けず嫌い、生理的反応からみた負けず嫌い、研究対象としての負けず嫌いなどに関する話題が提供され様々な視点から議論が行われた。また、この流れを受けて、西田他 (2013) は、「負けず嫌いとはスポーツ動機づけ：研究方法を探る！」と題する RTD を企画し、質問紙調査、エキスパート選手の熟達化、メンタ

ルトレーニングといった3つの視点から、負けず嫌いの実態把握や研究方法などに関する話題提供とそれらを踏まえた議論が行われた。

また、2017年の「児童心理」において特集（負けず嫌いな子）が企画され、負けず嫌いの心理から育成の問題に至るまで多くの研究者によって多面的に記述された。その中で、西田他 (2017) は、スポーツ心理学からみた負けず嫌い研究の必要性を指摘している。一方、国外の研究としては、Tomer, et al. (2014) が「勝利を愛するか敗北を嫌うのか」と題する研究の中で、動機づけの接近—回避行動メカニズムに関して生物学的な立場からの検討を試みている。

このように、これまでの負けず嫌いに関連する研究や取り組みはいくつかみられるものの、「負けず嫌い」「hating to lose」などをキーワードにした文献検索 (CiNii, Web of Science) において、一般的な雑誌の記事や啓蒙書などを除くと、ここに示した論文以外は見当たらなかった。総じて言えば、負けず嫌いに関する学術的研究の意義とは裏腹に、これまでの研究の蓄積は十分であったとは言い難い。しかしながら、これらのレビューを通して今後の研究に向けての課題が明らかになってきた。

第1は、負けず嫌いの定義の問題である。冒頭に示したように、負けず嫌いは「他人に負けることを嫌う勝気な性質であること。また、そのさま。まげざらい。」と記載されている (デジタル大辞泉, 2013)。この定義では、負けの対象が他人であること、勝気な性格的要素を持っていることが強調されている。これに関して、西田他 (2014) は、先述した日本スポーツ心理学会での RTD を踏まえて、負けの対象は多くの場合は他者であるが、自分自身に対して向けられることもあることを主張している。自分で決めた目標やノルマが達成できなかつたり、大事な場面で感情のセルフコントロールがうまくできなかつたり、いわゆる自分自身との戦いに負けてしまうことがその例である。この考え方は、渡辺・土井 (2007) の負けず嫌いの捉え方とも一致している。また、負けず嫌いは、競争心、勝利への執念などに近い概念であること、エキスパート・スポーツ選手の発話分析からは、「今できない自分への歯がゆさ」「結果を競う他者意識」「目標としての他者意識」「自身の更なる向上への希求」といったカテゴリーが見られたことも指摘される (西田他, 2014)。そこで、本研究では、これまでの議論と負けず嫌いの感情面 (悔しさなど) の存在を考慮して、負けず嫌いとは、「自己の判断基準に基づく他者あるいは自己と

の比較において、達成状態ではないと判断した時に生じる感情に対して強く反発し、満足できる状態まで到達させようとする比較的安定した個人的特性」と定義した。

第2は、負けず嫌いの測定に関する課題である。著者らは、上述した定義に依拠した測定尺度の作成を試みた。その際には、負けの対象が「他者」と「自己」であることを確認し、負けず嫌いの内容としては、これまでの関連文献やRTDにおける議論も踏まえて、性格面として、勝利希求（勝ち気）、固執（勝つことへの拘りや執念）を取り上げ、負けず嫌いが行動として表出した側面として、悔しさ（腹立たしさ、歯がゆさ）、リベンジ（仕返し、見返し）を設定した。これらの関係を示すと表1の通りである。そして、3つの学校のいずれかに在籍する高校生男子225名、女子374名の計599名を対象に予備調査を行った。質問項目は、表1に準じてこれまでの関連文献やスポーツ選手のインタビューなどを参考に48項目を作成した（2対象×4内容×6項目）。これらの項目に探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を適用した結果、2因子が抽出され、それぞれ「他者に対する負けず嫌い」「自己に対する負けず嫌い」と命名した。各因子には、負けず嫌いの4つの内容（勝利希求、固執、悔しさ、リベンジ）がすべて含まれていた。すなわち、負けず嫌いの内容ではなく、負けの対象によって因子が抽出されることになった。そこで、因子負荷量の高い項目を基準として、他者に対する負けず嫌い12項目（勝利希求、固執、悔しさ、リベンジ各3項目）、自己に対する負けず嫌い12項目（勝利希求、固執、悔しさ、リベンジ各3項目）の計24項目を選出し、負けず嫌いの測定尺度とした。この尺度の信頼性（ α 係数=.934～.936）は高く、運動やスポーツを行う動機づけと正の相関関係（ $r=.507\sim.619$ ）が認められ、現在のスポーツ活動の有無による弁別力も確認された（有）無）。これらの予備調査結果から、負けず嫌いは、「他者に対する負けず嫌い」と「自己に対する負けず嫌い」の2つの下位尺度で測定可能であることが示唆

表1 負けず嫌い項目の内容

内容	負けの対象	
	他者	自己
性格面	勝利希求	勝利希求
	固執	固執
行動面	悔しさ	悔しさ
	リベンジ	リベンジ

され、それぞれの負けず嫌いには、「勝利希求、固執、悔しさ、リベンジ」といった内容が含まれることが明らかとなった。

第3の課題は、負けず嫌いとスポーツ活動との関連性についてである。具体的に言えば、負けず嫌いと過去のスポーツ活動経験とはどのような関係があるのか、スポーツ経験者は未経験者よりも負けず嫌いなのか、現在スポーツ活動に参加している者やレギュラーに属する者は負けず嫌いなのか、負けず嫌いと競技レベルや競技成績とはどのような関係があるのかなどがあげられる。いずれの問題もこれまでに検討されていない。これらを明らかにすることによって、負けず嫌いがスポーツ活動を通してどのように関わり育てられていくのかといった問題に迫ることも期待できる。

目的

本研究では、負けず嫌いの研究を推進させていくための最初のステップとして、負けず嫌いの測定尺度を作成し信頼性および妥当性を検討すること、また、その尺度を用いて負けず嫌いとスポーツ活動との関連性を明らかにすることを目的とした。

方法

1. 調査対象者

本調査は、1都2県の高校（4校）に在籍する男子255名、女子412名の計667名に実施された。学年および男女の内訳は、表2の通りである。年齢の範囲は15歳から18歳、平均値は16.2歳であった。

表2 対象者数

	1年	2年	3年	計
男子	98	95	62	255
女子	143	188	81	412
計	241	283	143	667

2. 調査内容

(1) 基本的属性

学年、年齢、性、スポーツ活動の経験、現在のスポーツ活動（スポーツ種目、レギュラーの有無、これまでの最高の競技大会と成績）について質問した。

(2) 負けず嫌い

前述した予備調査を経て選出された負けず嫌いの測定項目は、表3に示す通りである。また、それらの構

表3 負けず嫌いの質問項目

1. 誰よりも、自分が一番でありたい
2. 人と競い合うときは、負けないことにこだわる
3. 競争で負けると、非常に腹が立つ
4. 勝負に負けた相手には、いつか必ず仕返ししたい
5. 私には、勝つことしか考えられない
6. 何かを競うときは、なにがなんでも負けたくない
7. 他の人よりも劣っている自分が許せない
8. 今は負けている相手でも、将来は勝って見返したい
9. 勝ちたいという気持ちは、誰にも負けたくない
10. 競争するときは、相手に負けないことだけを考えている
11. 周りの人と比べて自分が劣っていると、なにくそと思う
12. 競争に負けたとき、もっと強くなって見返したい
13. 自分で決めた目標は、ぜひとも達成したい
14. 自分で決めたことは、途中であきらめることはない
15. 自分でやろうとしたことができない自分に、腹が立つ
16. 自分で決めたことができないとき、次はなんとしてもうまくやりたい
17. 自分でやろうとしたことは、必ずうまく成し遂げたい
18. 自分が満足を得るためには、やろうと決めたことを変えることはない
19. 自分で決めたことができないと、悔しくて仕方がない
20. 自分の弱さがでたとき、次はそれを克服したい
21. やろうと決心したことは、自分が満足できるように達成したい
22. 自分がやろうとしたことは、納得できるまで絶対にやり続ける
23. 自分で立てた目標ができないことほど悔しいことはない
24. 自分の思った通りにできないとき、くじけず挑戦を続けたい

成は以下に示す通りである。()内の数字は、項目番号と対応している。

〈他者に対する負けず嫌い 12項目〉

勝利希求 (1, 5, 9) 固執 (2, 6, 10)

悔しさ (3, 7, 11) リベンジ (4, 8, 12)

〈自己に対する負けず嫌い 12項目〉

勝利希求 (13, 17, 21) 固執 (14, 18, 22)

悔しさ (15, 19, 23) リベンジ (16, 20, 24)

各項目への回答は、「ほとんどあてはまらない (1点)」から「よくあてはまる (5点)」までのリッカート法で行われた。

(3) 多面的競争心

太田 (2010) が作成した多面的競争心尺度を使用した。この尺度は、手段的競争心 (7項目)、負けず嫌い (4項目)、社会的承認 (3項目)、過競争心 (4項目)、競争回避 (3項目) の計21項目から成り立っている。「あてはまらない (1点)」から「あてはまる (5点)」までの5段階評価で回答を求めた。

(4) 達成動機

堀野・森 (1991) による達成動機の測定尺度を用い

た。それらは、自己充實的達成動機 (13項目)、競争的達成動機 (10項目) の計23項目で構成されている。各項目の回答肢は、「全然あてはまらない (1点)」から「非常によくあてはまる (7点)」までの7段階であった。

(5) 動機づけ

西田 (2019) が社会的一体感の尺度作成の中で作成したものを使用した。すなわち、動機づけの定義、桜井・高野 (1985) の内発的—外発的動機づけ尺度、体育における学習意欲に関連する検査 (西田, 1989; 西田, 2004; Nishida, 2007) などを参考にして選定された8項目である。それらは、積極性・自発性、学習ストラテジー、達成、知的好奇心、自律性・自律的動機づけ、困難の克服・努力、挑戦、持続性などの内容を含んでいる。これらの8項目に対して、勉強する時、運動やスポーツをする時の2条件でそれぞれ回答を求めた。前者が「動機づけ (勉強)」、後者は「動機づけ (運動やスポーツ)」と命名した。各項目への回答は、「ほとんどあてはまらない (1点)」から「よくあてはまる (5点)」までのリッカート法で行われた。

3. 調査方法

調査対象校に質問紙を送付し、学級単位で調査を実施した後に調査用紙を回収した。調査の際には、学校の成績とは一切関係ないこと、無記名の調査で個人が特定されないこと、質問紙への回答は任意で辞退することも可能であることを質問紙のフェイスシートに明記し、調査の実施前に担当者が口頭で伝えた。また、調査協力への同意は、質問紙に回答する前に該当する欄にチェックを入れることによって得た。

なお、本研究は、愛知学院大学心身科学部健康科学科および健康栄養学科における「ヒトを対象とする研究審査委員会 (倫理委員会)」の承認を得て実施された (受付番号: 1605)。

4. 分析

統計分析は、IBM SPSS Statistics Ver.22.0およびIBM SPSS Amos Ver.22.0を用いて行われた。検定の有意水準は5%とした。

(1) 負けず嫌いの構成概念と信頼性の検討

負けず嫌いの構成概念を検討するため、また、予備調査において抽出されている2因子が異なる集団のデータでも安定して抽出できるかどうかを検証するため、因子数を2に固定し、主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。また、抽出され

た因子のデータに対するあてはまりの良さを検証するため、確認的因子分析を行った。適合度指標は、GFI (Goodness of Fit Index : 0.90 以上もしくは0.95 以上が良好)、CFI (Comparative Fit Index : 0.90 以上もしくは0.95 以上が良好)、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation : 0.05 未満が良好、0.05 から0.1 未満が許容範囲)を用いた(朝野他, 2005)。また、抽出された因子を構成する項目の内的整合性を確認するため、 α 係数および折半法による相関係数を求めるとともに、安定性を確かめるために一定期間をおいて繰り返し収集したデータの相関係数を算出した。

(2) 基準関連妥当性の検討

抽出された構成概念の基準関連妥当性を検証するために、因子を構成する項目群の合計得点を算出し、多面的競争心尺度(太田, 2010)の5下位尺度、達成動機尺度(堀野・森, 1991)の2下位尺度、動機づけ(勉強)、動機づけ(運動やスポーツ)得点との相関係数を求めた。

(3) 負けず嫌いの属性別比較

負けず嫌いの因子を構成する1項目当たりの平均値を、性別(t検定)、学年別(一元配置分散分析)、運動部活動所属の有無(t検定)、高校入学前のスポーツ活動経験の有無(一元配置分散分析)、所属している部活動の種目別(個人種目・集団種目:t検定)、レギュラー・非レギュラー別(t検定)、競技会での成績レベル別(一元配置分散分析)に比較した。なお、一元配置分散分析後の多重比較は、ボンフェローニの方法を用いた。

結果および考察

1. 調査対象者の属性

質問紙への回答は、667名から得られた(回収率100%)。従って、分析の対象となった生徒の性別・学年別の人数は、表2に示した通りである。

次に、高校入学前のスポーツ活動状況は、「ずっと何もしていない」と回答したものが89名(13.3%)で、575名(86.2%)は小学校から中学校にかけて何らかのスポーツに取り組んでいた(不明3名)。また、調査実施時に運動部に所属していた生徒は325名(48.7%)、無所属は341名(51.1%)であった(不明1名)。325名が取り組むスポーツ種目は、サッカー(41名)、バドミントン(36名)、弓道(33名)、硬式野球(30名)、ハンドボール(28名)、バスケットボール(26名)、卓球(21名)、陸上競技(19名)など多岐に及んでいた。

さらに、調査実施時点までに出場した大会(回答:161名、無回答:506名)は、インターハイや国体などの全国規模あるいは県大会・地区大会を勝ち抜いて出場できる地方の大会(例:関東大会、東北大会)に出場した経験のある生徒が5名(3.1%)で、ほとんどの生徒の出場大会レベルは県および地域(区・市)であった。

以上により、分析対象の高校生は、調査実施時点では運動部活動実施者が全体の約半数であったが、小学校から中学校にかけては約90%がスポーツ活動に取り組んでいた。従って、スポーツ活動に取り組むことに含まれる特徴的な事態(例:仲間やライバルとの競い合いの中であと少しのところまで負けてしまうなど)を、個人差はあるものの、ほとんどの生徒が体験し、悔しさや辛さなどを抱く経験を持っていると推察される。また、調査実施時点の部活動所属者は分析対象者の約半数であるが、様々なスポーツ経験を有する標本集団といえる。

一方で、競技水準は、出場した大会のランクを見る限り競技能力が高い生徒の存在は少なく、多くの分析対象者の競技水準は平均的であると考えられる。

2. 負けず嫌い尺度の構成

(1) 抽出因子の内容と適合度

記述統計(歪度)を確認した結果、各項目に回答の強い偏りはみられなかった。そこで全24項目に対して主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。因子数は、予備調査の結果により負けず嫌いの対象として他者と自己が想定されたことから2に指定して行われた。

その結果、それぞれ12項目の想定された2因子が抽出された。各項目の因子負荷量はすべて.40以上を示し、複数の因子に.40以上の値を示す項目はみられなかった。第1因子は負けず嫌いの対象が自己であること、第2因子は他者であることを説明する12項目ずつで構成され、2因子とも4つの内容(勝利希求、固執、悔しさ、リベンジ)がすべて含まれていた。なお、抽出後の固有値は第1因子が9.85、第2因子が2.82であった。

次に、抽出された2因子のデータに対するあてはまりの良さを検証するため、確認的因子分析を実施した。分析の結果、GFIが.795、CFIが.854、RMSEAが.094であり、データに対するあてはまりが良好とはいえないことが判明した。そこで、各因子の4つの内容を説明する各3項目の中で、もっとも標準化係数の値

が低い1項目を除外し、各内容を2項目構成として2因子(2因子×4内容×2項目=16項目)による確認的因子分析を改めて実施した。その結果、GFIが.905、CFIが.927、RMSEAが.078となり、適合度が改善するとともに、いずれの指標ともデータへのあてはまりが良好または許容される範囲であることが確認された(図1)。

第1因子は、いずれの8項目とも自己に対する負けず嫌いの項目であり、「21. やろうと決心したことは、自分が満足できるように達成したい(.83)」「17. 自分でやろうとしたことは、必ずうまく成し遂げたい(.77)」の勝利希求(括弧内の数値は標準化係数。以下同様)、「16. 自分で決めたことができないとき、次はなんとしてもうまくやりたい(.78)」「24. 自分の思った通りにできないとき、くじけず挑戦を続けたい(.80)」のリベンジ、「22. 自分がやろうとしたことは、納得できるまで絶対にやり続ける(.77)」「14. 自分が決めたことは、途中であきらめることはない(.66)」の固執、そして「19. 自分で決めたことができないと、悔しくて仕方がない(.71)」「23. 自分で立てた目標ができないことほど悔しいことはない(.66)」の悔しさといった4つの負けず嫌いを含む内容から構成されていた。従って、第1因子を「自己に対する負けず嫌い」と解釈・命名した。

第2因子は、全8項目とも他者に対する負けず嫌いの

項目であり、「5. 私には、勝つことしか考えられない(.74)」「1. 誰よりも自分が一番でありたい(.65)」の勝利希求、「4. 勝負に負けた相手には、いつか必ず仕返ししたい(.71)」「8. 今は負けている相手でも、将来は勝って見返したい(.70)」のリベンジ、「6. 何か競うときは、なにがなんでも負けたくない(.78)」「10. 競争するときは、相手に負けたくないことだけを考えている(.74)」の固執、そして「3. 競争で負けると、非常に腹が立つ(.72)」「11. 周りの人と比べて自分が劣っていると、なにくそと思う(.65)」の悔しさといった4つの内容から構成されていたことから、「他者に対する負けず嫌い」の因子と解釈・命名した。

以上のことから、負けず嫌いの構成概念は、内容として勝利希求、固執、悔しさ、リベンジを含み、それらの性格面や行動面が自分自身に向いている場合と他者に向いている場合の2つの側面で捉えられることが明らかになったと言える。そこで、「自己に対する負けず嫌い(以下、「自己」と称す)」と「他者に対する負けず嫌い(以下、「他者」と称す)」の2つの下位尺度で構成される「負けず嫌いの尺度」を作成することにした。具体的な質問項目と選択肢は、表4に示す通りである。

それぞれの下位尺度の1項目当たりの平均値と標準偏差は、自己が3.61と0.80、他者が2.96と0.90であつ

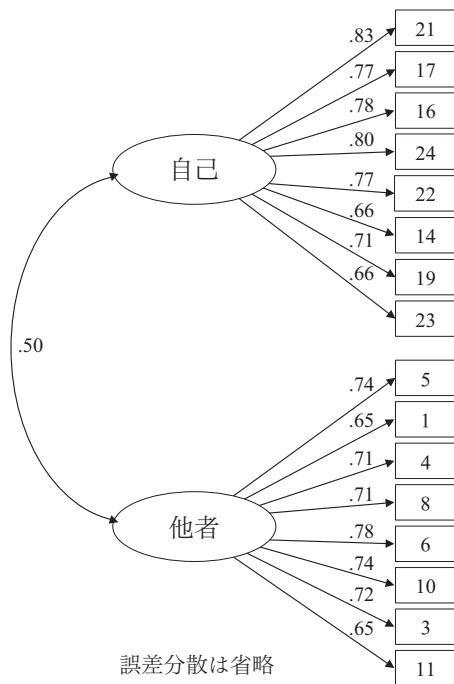


図1 負けず嫌いの確認的因子分析

表4 負けず嫌いの尺度の項目と回答肢

自己に対する負けず嫌い	
17.	自分でやろうとしたことは、必ずうまく成し遂げたい
21.	やろうと決心したことは、自分が満足できるように達成したい
14.	自分が決めたことは、途中であきらめることはない
22.	自分がやろうとしたことは、納得できるまでやり続ける
19.	自分で決めたことができないと、悔しくて仕方がない
23.	自分で立てた目標ができないことほど悔しいことはない
16.	自分で決めたことができないとき、次はなんとしてもうまくやりたい
24.	自分の思った通りにできないとき、くじけず挑戦を続けたい
他者に対する負けず嫌い	
1.	誰よりも、自分が一番でありたい
5.	私には、勝つことしか考えられない
6.	何かを競うときは、なにがなんでも負けたくない
10.	競争するときは、相手に負けたくないことだけを考えている
3.	競争で負けると、非常に腹が立つ
11.	周りの人と比べて自分が劣っていると、なにくそと思う
4.	勝負に負けた相手には、いつか必ず仕返ししたい
8.	今は負けている相手でも、将来は勝って見返したい

回答肢(得点): ほとんどあてはまらない(1)
あまりあてはまらない(2) どちらともいえない(3)
ややあてはまる(4) よくあてはまる(5)

た。また、下位尺度間の相関係数は、0.47であった。

(2) 構成項目の内的整合性と安定性

負けず嫌い尺度の信頼性の分析として、各下位尺度を構成する項目の内的整合性を確認するためクロンバックの α 係数を求めたところ、「自己」は.91、「他者」は.89であった。また、検査の安定性を確認するため、任意に抽出した高校（1校）の生徒64名を対象に、負けず嫌い尺度を3週間から4週間の間隔をあけて2回実施し、得られたデータの相関係数を求めた。その結果、「自己」は $r=.60$ 、「他者」は $r=.72$ であった。必ずしも高いとは言えないが中程度の相関係数が得られ、調査対象者は比較的安定して回答していたと推察される。以上により、抽出された2因子を説明する項目の内的整合性はおおむね満足できる水準にあると考えられる。

(3) 基準関連妥当性

負けず嫌い尺度の「自己」と「他者」を説明する各8項目の合計得点と、多面的競争心尺度（太田, 2010）の5下位尺度得点、達成動機測定尺度（堀野・森, 1991）の2下位尺度得点、動機づけ（勉強）得点、動機づけ（運動やスポーツ）得点との相関係数を求めた（表5、表6）。

表5 負けず嫌いとは多面的競争心との相関係数

	手段的競争心	負けず嫌い	社会的承認	過競争心	競争回避
自己に対する負けず嫌い	.56**	.50**	.34**	.16**	-.26**
他者に対する負けず嫌い	.43**	.69**	.45**	.52**	-.15**

** $p<.01$

表6 負けず嫌いとは達成動機、動機づけとの相関係数

	達成動機		動機づけ	
	自己充實的	競争的	勉強	運動やスポーツ
自己に対する負けず嫌い	.62**	.39**	.56**	.51**
他者に対する負けず嫌い	.33**	.61**	.31**	.44**

** $p<.01$

その結果、多面的競争心尺度については、「自己」と「手段型競争心」「負けず嫌い」との間には中程度、「社会的承認」「過競争心」との間には弱い正の相関がみられた。一方「競争回避」との間には弱い負の相関がみられた。また、「他者」と「手段型競争心」「負けず嫌い」「社会的承認」および「過競争心」との間に

は中程度からやや強い正の相関がみられ、「競争回避」との間には弱い負の相関がみられた。「自己」「他者」ともに、勝利希求、固執、悔しさ、リベンジが強く意識されれば、競い合いを通じて自分を高めたい（手段的競争心）、競争相手に負けるのは悔しい（負けず嫌い）、社会的に高い地位を得たい（社会的承認）、勝つためならば手段を選ばない（過競争心）などの気持ちとの間に、強弱の差はあっても正の相関関係が認められることは十分に考えられる。また、それとは逆に、競争的な状況を避けたい（競争回避）という気持ちとの負の相関関係も想定される結果であると言える。

次に、達成動機尺度については、「自己」と自分を高めたいあるいは内面を深めたいという「自己充實的達成動機」との間にはやや強い正の相関がみられ、他者よりも優れたたいという「競争的達成動機」との間にはやや弱い正の相関がみられた。一方、「他者」と「自己充實的達成動機」との間にはやや弱い正の相関がみられ、「競争的達成動機」との間にはやや強い正の相関がみられた。これらの結果は、負けず嫌いを構成する概念と達成動機が相互に関連性を持っていることを示している。

また、動機づけ（勉強）と動機づけ（運動やスポーツ）については、両方とも「自己」との間にはやや強い正の相関がみられた。一方、「他者」と動機づけ（勉強）の間にはやや弱い正の相関がみられ、動機づけ（運動やスポーツ）の間には中程度の正の相関がみられた。勉強や運動・スポーツに取り組む際には、自己の向上を目指す場面あるいは競い合いや他者との比較の場面などが多く含まれることを考えると、「自己」や「他者」といった負けず嫌いが、動機づけ（勉強、運動やスポーツ）との間に中程度の正の相関関係を示すことは、十分に想定可能な結果と言える。

これらの相関関係から得られた結果は、本研究で作成された負けず嫌い尺度の基準関連妥当性を支持するものである。

(4) まとめ

探索的および確認的因子分析の結果、負けず嫌いの構成概念は、負けず嫌いの性格面や行動面としての4つの内容（勝利希求、固執、悔しさ、リベンジ）を含む「自己に対する負けず嫌い」と「他者に対する負けず嫌い」の2側面から説明することができた。渡辺・土井（2007）は、小学生を対象とする研究において、負けず嫌いが他者との比較における優位性と自己向上への強い志向性の2つの側面から成立することを指摘している。本研究において、同様のこと（負けず嫌い

の自己と他者)が、高校生を対象としたデータにおいても示された。また、探索的因子分析で予備調査と異なる対象者においても因子抽出の再現性がみられたこと、確認的因子分析で2因子のデータに対する適合の良さが示されたことから、負けず嫌いの因子的妥当性が認められたと言える。

これらの過程を経て作成された負けず嫌い尺度の内的整合性と安定性に関する信頼性係数は、ほぼ満足できる水準にあることが認められた。また、負けず嫌いと多面的競争心、達成動機、動機づけ(勉強、運動やスポーツ)との間には、妥当な解釈が可能な関連性が認められ、基準関連妥当性を支持する結果が得られた。

以上のことから判断して、本研究で作成された「自己に対する負けず嫌い」と「他者に対する負けず嫌い」を下位尺度とする負けず嫌い尺度は、信頼性および妥当性を備えた高校生の負けず嫌いを測定できる尺度として利用可能であると言える。従って、以後の分析では本尺度を用いて対象者の属性や負けず嫌いとの関係を検討する。

3. 対象者の属性別による負けず嫌いの比較

(1) 性および学年

負けず嫌いの下位尺度ごとに1項目当たりの平均値を算出して男女別に比較した。分析の結果、「自己」は有意な差がみられなかった($t(659)=1.81$, ns; 男子($n=251$) $3.66 \pm .83$, 女子($n=410$) $3.57 \pm .79$)。一方、「他者」は有意な差がみられ男子の得点が高かった($t(655)=4.60$, $p<.01$; 男子($n=250$) $3.16 \pm .91$, 女子($n=407$) $2.83 \pm .86$)。

高校生と大学生を対象に自己評価的意識の性差を検討した梶田(1988)は、自分に対する自信を自覚する場合、男子は他者との比較における自らの優越・劣等意識が強く関わるのに対し、女子の場合は他者との比較ではなく自己受容(「今のままでは自分はいけない」という意識)との関係が強いと考えられることを指摘している。負けず嫌いの性差において、特に、他者に向かう負けず嫌いが男子において強くみられることの背景には、自らの自己評価的意識を維持することにおいて、特に他者との間に生じる劣等意識の解消が重要な内的課題として位置付けられているからではないかと推察される。

また、学年別の比較では、「自己」には学年の有意差はみられなかったが、「他者」には学年の有意差が認められた($F(2,654)=3.27$, $p<.05$)。多重比較の結果、2・3年生と1年生の間に有意差があり、2・3年生

は1年生よりも他者に対する負けず嫌いの得点が高かった。

小学から中学、高校へと学年・学校段階が上がるにつれて、自己意識の中の自信や自己受容などは下降傾向を示すが、その原因の一つとして、自らに対する要求水準が高くなることが指摘されている(梶田, 1988)。また、自己意識の形成と発達という視点で高校段階をみると、自分なりの価値体系を確立し、自らの精神的な軸を築くという課題に取り組む時期(梶田, 1988)とされている。このような高校段階の自己意識の形成過程を踏まえると、他者に向かう負けず嫌いが高学年において高かったことの原因としては、以下のようなことが考えられる。すなわち、自立への過程の中で取り組む様々な課題への挑戦では、自ら要求水準を厳しくすることで、それが達成できればより高く自立した自分を獲得できたことになる。しかし、特に、その課題が他者との競争や競い合いであった場合、負けるということは、得ようとしている自己を獲得できないことが客観的に明らかになることであり、より高い価値体系を確立し精神的な軸を構築するという目標が揺らぐ、あるいは失うことを意味する。そしてその意味は、自己実現の欲求が活発に働くようになる高校生(桜井, 2009)では、人生上の重要な課題である職業選択を自律的に行うことが求められる段階に近い高学年ほど、大きなものになると考えられる。従って、2・3年生は、他者との競い合いに負けた場合は、まだ自分なりの精神的な軸を構築することに切迫していないと考えられる1年生よりも、強く「負け」を受け入れない態度を示そうとし、負けず嫌いが顕現化するのではないかと推察される。

(2) 運動部活動への所属

調査実施時点で運動部活動所属者と無所属者との間で、負けず嫌いの平均値を比較した。分析の結果、「自己」は、所属している生徒の平均値が有意に高いことが示された($t(658)=3.50$, $p<.01$; 所属($n=322$) $3.72 \pm .78$, 無所属($n=338$) $3.50 \pm .82$)。また、「他者」についても、所属している生徒の平均値が有意に高かった($t(654)=7.10$, $p<.01$; 所属($n=319$) $3.20 \pm .83$, 無所属($n=337$) $2.72 \pm .89$)。

運動部に所属する生徒は、それぞれ達成すべき課題の内容や困難さに違いはあっても、自分なりの目標を設定し活動していると考えられる。そして、そのような目標達成を目指す上では、納得できる水準に及ばない結果しか得られず、もっと練習に取り組まなければ自分の向上は期待できないと考えさせられることや、

ライバルとの勝負に負け、次こそは勝つぞという思いを抱く体験を数多く経験していると推察される。また、その経験数は、端的に考えれば、日常生活の中に含まれる同様の経験に加算されることになると考えられる。従って、運動部活動に取り組む者において、自己と他者の双方に向かう負けず嫌いがより強く意識されるということは、十分に考えられることである。

(3) 高校入学前のスポーツ活動経験

高校入学前のスポーツ活動経験は、「1：小・中学校ともに経験あり」(295名)、「2：小学校のみで経験あり」(51名)、「3：小学校なし・中学校あり」(224名)、「4：未経験」(88名)の4群に分類された(不明：9名)。負けず嫌いを群間で比較した結果(表7)、「自己」と「他者」とともに群間に有意な差が認められた(自己(F(3,657)=8.85, p<.01), 他者(F(3,650)=16.91, p<.01))。

多重比較の結果、「自己」は、小・中学校共に取り組んできた生徒がもっとも高いことが明らかとなったが、他の3群間には有意な差はみられなかった。また、「他者」についても、小・中学校共に取り組んできた生徒がもっとも高く、加えて、「中学校から始めた」生徒は「ずっとなにもしてこなかった」生徒よりも得点が有意に高いことが示された。

本結果についても、運動部活動に所属している生徒と無所属の生徒の比較結果と同様に、他者との競い合いに負けても「次こそは勝つぞ」と取り組み続ける経験、またそれらの経験に伴う悔しさを味わいながら、「なにくそ」とくじけそうな気持ちを奮い立たせて練習に取り組む経験などは、スポーツ活動を多く行ってきた生徒の方がより多く経験していると考えられる。従って、小・中学校共にスポーツ活動に取り組んできた生徒において、「自己」「他者」共にその意識が高いという結果は、妥当な結果であると考えられる。

表7 高校入学前のスポーツ活動経験別にみた負けず嫌い尺度得点の比較

	スポーツ活動経験				多重比較 (p<.05)
	1	2	3	4	
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	
自己に対する負けず嫌い	3.78 (.75)	3.44 (1.01)	3.50 (.87)	3.41 (.76)	1>2, 3, 4
他者に対する負けず嫌い	3.20 (.88)	2.80 (.93)	2.85 (.86)	2.51 (.78)	1>2, 3, 4 3>4

1. 小・中学校とも経験あり
2. 小学校のみ経験あり
3. 小学校なし・中学校あり
4. 小・中学校とも未経験

(4) 部活動の種目(個人・集団)

所属している部活動が個人競技の生徒と集団競技の生徒との間で負けず嫌いを比較した。個人競技には陸上競技、水泳、テニス、バドミントンなどの他に弓道、剣道、柔道、および新体操が含まれた。一方、集団競技はサッカー、バスケットボール、ハンドボール、バレーボールなどであった。分類では、競技中のフィールド内に同一チームの多人数の選手が存在し、選手の入替えが可能であり、さらにオープンスキルによって競技が行われる種目を集団競技と捉えた。

分析の結果、「自己」「他者」のいずれも種目間では有意な差がみられなかった(自己 t(309)=1.25, ns; 個人競技 (n=156) 3.79±.75, 集団競技 (n=155) 3.68±.78, 他者 t(306)=-1.82, ns; 個人競技 (n=155) 3.15±.78, 集団競技 (n=153) 3.32±.86)。

本結果は、負けず嫌いに関係する感情や行動などが生起する状況は競技種目により条件が異なると考えられるが、悔しさや次は取り返したい、次こそは勝ちたいという感情やそれに伴う行動については、両種目間で質的あるいは量的に大きな違いはないことを示している。

(5) レギュラー・非レギュラー

チームのレギュラーメンバーである者とレギュラーではない者において、負けず嫌いに差があるのかどうかを比較した。その結果、「自己」「他者」共にレギュラーとして活動する生徒の方が有意に高い得点を示した(自己 t(304)=2.34, p<.05; レギュラー (n=162) 3.82±.70, 非レギュラー (n=144) 3.61±.85, 他者 t(301)=2.30, p<.05; レギュラー (n=162) 3.30±.81, 非レギュラー (n=141) 3.08±.85)。

これらの結果は、チームにおいてレギュラーの立場を獲得するためには、長期に及ぶ努力と負けず嫌いが重要な要因になっていることを示唆しているといえる。

(6) 競技大会と成績

これまでに出場を果たした大会とその時の成績を基準にして、調査対象者を2群に分け、「自己」と「他者」の平均値を比較した。群分けは、「①全国大会(インターハイ、国体など)や地方大会(関東地区大会、東北地区大会など)に出場し上位入賞の成績あり」「②全国大会や地方大会への上場のみで成績なし」「③県大会に出場し上位入賞の成績あり」「④県大会に出場のみで成績なし」「⑤市区およびその他の大会に出場し上位の成績あり」「⑥市区およびその他の大会に出場のみで成績なし」を基準に行い、①から③を成績レ

ベル上位群, ④から⑥を下位群した。分類の結果, 上位群には45名, 下位群には116名が該当し(無回答506名), 2群の t 検定を行った結果, 「自己」「他者」いずれも成績レベル別の有意な差はみられなかった(自己 $t(157)=.42$, ns 上位群 (n=45) $3.86 \pm .71$, 下位群 (n=114) $3.81 \pm .73$, 他者 $t(155)=1.85$, ns 上位群 (n=45) $3.43 \pm .72$, 下位群 (n=112) $3.17 \pm .81$)。

調査対象者の参加可能な競技大会のレベルが上がり, さらにその成績が向上する過程では, 負けず嫌いが強いほど両方の水準が高くなると推察される。従って, 成績上位群の負けず嫌い得点の方が高いことが予想される。しかしながら, 分析結果からは, そのような関係性が示されなかった。その原因の一つとしては, 分析対象者の成績レベルを明確に区分できていなかった可能性があげられる。より高い水準の全国あるいは地方規模の大会への出場経験者は5名と少数であったことから, 操作的に分類された成績上位群の45名中の40名は, 大会のレベルとしては一部, 下位群と同じ「県大会」での入賞経験というレベルであった。従って, 成績上位群には下位群と同程度の負けず嫌いを有する対象者が含まれていたとも考えられる。さらにこのことは, スポーツ活動に対する目標やそれに基づく動機づけの高さという点でも, 成績上位と下位との違いを明確化できていなかった可能性が高いことを示唆している。今後は, インターハイや国体, さらに国際大会への出場経験者やそれらの大会での入賞経験者を含むサンプルを収集した上で, 成績水準を明確に規定し比較検討することが必要と考えられる。

総括的考察

本研究の目的は, 負けず嫌いを測定できる信頼性と妥当性を備えた尺度を作成し, 負けず嫌いとスポーツ活動への取り組みとの間にどのような関係があるのかを検討することであった。

予備調査を経て負けず嫌いの構成概念を説明するための24項目を作成した。本調査は, それらの項目を用い, 667名の男女高校生を対象に行われた。収集されたデータに対して尺度の構成項目を選択するための探索的および確認的因子分析を実施した結果, 最終的に, 予備調査の結果とほぼ同じ項目構成で, 4つの内容(勝利希求, 固執, 悔しさ, リベンジ)をそれぞれ含み, 「自己に対する負けず嫌い」(8項目)と「他者に対する負けず嫌い」(8項目)と解釈できる2つの因子が抽出された。

これら2因子からなる下位尺度の信頼性と妥当性の検証を行った結果, いずれもほぼ満足できる水準であることが認められた。これらの結果により, 2つの下位尺度を持つ計16項目の「負けず嫌い尺度」が作成された。

次に, 負けず嫌い尺度から得られたデータをもとに, 負けず嫌いに関する属性別の比較を行った結果, 運動部活動に所属している生徒, 高校入学前からスポーツ活動に取り組んでいる生徒, そしてレギュラーの地位を獲得している生徒は, 「自己」と「他者」のそれぞれに対する負けず嫌いの意識が強いことが明らかになった。これは, 負けず嫌いの性格面(勝利希求, 固執)や行動面(悔しさ, リベンジ)がスポーツ活動経験に影響を及ぼしていることを示すものである。一方, これらの生徒の共通点としてスポーツ活動量が多いことを考えると, 悔しさや, 次こそは勝ちたいなどの負けず嫌いに関係する感情や認知, それに基づく行動や態度を, スポーツ活動を通じてより多く経験することで, 負けず嫌いが強化されたのではないかと推察される。

また, 女子よりも男子において, さらに, 1年生よりも2・3年生において, 「他者」に対する負けず嫌いがより強くみられることが示された。その要因としては, 青少年段階の自己評価的意識の維持において, 男子は女子に比べて, 他者との間に生じる劣等意識を解消することが内面的課題として重要であると考えられること, また自立した自分を獲得することにおいてより高い水準の精神的な軸を構築することの意味が, 高校段階では高学年ほど重要性が増すと考えられることがあげられた。

一方, 運動部活動の種目の違いと成績レベルの違いを視点とする比較では, 負けず嫌いに差はみられなかった。負けず嫌いの内容である勝利欲求, 固執, 悔しさ, リベンジをどのようなタイミングで, また, 量的にどれだけ多く経験するのかは, 種目の違いや成績レベルの違いよりも, 個人の動機づけや目標達成に向けた態度などではないかと考えられる。事実, 基準関連妥当性の検証で行った負けず嫌いと動機づけ(運動やスポーツ)との相関分析では, 自己に対する負けず嫌いとは他者に対する負けず嫌いの両方とも中程度以上の強さの正の相関を示した。取り組む種目が違っても, また, 成績レベルが異なっても, その種目に, それぞれのレベルに応じて, 高い動機づけと目標に対する強い達成欲求を持って取り組む個人においては, 負けず嫌いの意識が強くなるのではないかと考えられる。

本研究におけるこれらの結果から、負けず嫌いとはスポーツ活動は相互に関連性を持っていることが明らかになった。これは、負けず嫌いという個人的特性がスポーツ活動経験に影響を与えていること、これとは逆に、スポーツ活動の経験や取り組む条件などが負けず嫌いの形成に影響を与えているということを示している。後者の立場から言えば、スポーツ活動は、それに取り組む人に、負けず嫌いという特性あるいはそれに特徴づけられる行動を生じさせるということである。しかしながら、ただ単にスポーツ活動に取り組んでいれば、どのような人にもそれがあてはまるということではない。目標達成に向けた強い意志と動機づけを持ち、悔しさや「何くそ。次こそは。」という意識や考えを、努力の継続に振り向けることができる人においてみられるということであろう。多くのトップアスリートにおいて負けず嫌いが語られる背景には、このようなスポーツ活動とその取り組み方との関係が存在するのではないかと考えられる。

最後に残された今後の研究課題について述べる。第1に、負けず嫌いの形成・強化の過程を検討することがあげられる。本研究は横断的に得られたデータに基づいており、負けず嫌いが時系列的にどのように生まれ、変化し、行動や成績に結びつくのかということについては検討していない。負けず嫌いの形成過程を検討することは、スポーツ場面での適正なコーチングのあり方などを考察する上でも重要であると考えられる。

第2は、その形成過程を媒介する影響要因を明らかにすることである。スポーツに取り組む個人が、自らの身体的・心理的要因や仲間や指導者を含む社会的要因からどのような影響を受けて負けず嫌いとなっていくのかを、量的にあるいは質的に明らかにしていくことは、スポーツ活動を充実させる環境づくりを進めていく上で極めて重要であると考えられる。

第3は、本研究で作成された「負けず嫌い尺度」の適用範囲の拡大についての検討である。本尺度の作成によって、負けず嫌いに関する研究が推進される状況が生まれたが、本尺度の有用性をさらに高めるためには、高校生以外の学校段階や年齢段階においても適用可能かどうかについて検討する余地がある。

謝 辞

資料の収集にあたっては、調査対象校の皆様大変お世話になりました。ここに深甚の謝意を表します。

文 献

- 朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢 (2005). 入門 共分散構造分析の実際. 講談社サイエンティフィック.
- 堀野 緑・森 和代 (1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因. 教育心理学研究, **39**(3), 308-315.
- 梶田 毅一 (1988). 自己意識の心理学. 東京大学出版会.
- 北村勝朗・磯貝浩久・高畑好秀・菅生貴之・渋谷崇行 (2012). 負けず嫌いの意味を探る—負けず嫌いはトップアスリートの条件なのか?—. 日本スポーツ心理学会第39回大会研究発表抄録集, 14-15.
- 中須賀 巧 (2012). 体育授業における成績雰囲気が生徒の競争心に与える影響. 日本教科教育学会誌, **35**(2), 81-90.
- 西田 保 (1989). 体育における学習意欲検査 (AMPET) の標準化に関する研究—達成動機づけ論的アプローチ—. 体育学研究, **34**(1), 45-62.
- 西田 保 (2004). 期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究. 杏林書院.
- Nishida, T. (2007). Diagnosis of Learning Motivation in Physical Education Test (DLMPET) and its applicability to educational practice. *International Journal of Sport and Health Science*, **5**, 83-97.
- 西田 保 (2019). 社会的一体感の尺度作成. 愛知学院大学心身科学部紀要, 第15号, 1-7.
- 西田 保・磯貝浩久・佐々木万丈・北村勝朗・齊藤 茂 (2013). 負けず嫌いとはスポーツ動機づけ: 研究方法を探る!. 日本スポーツ心理学会第40回大会研究発表抄録集, 8-9.
- 西田 保・佐々木万丈・北村勝朗・磯貝浩久・齊藤 茂 (2014). 負けず嫌いとはスポーツ動機づけの理解に向けて. 総合保健体育科学, **37**, 13-21.
- 西田 保・佐々木万丈・北村勝朗 (2017). スポーツ心理学からみた負けず嫌い. 児童心理, **71**(4), 54-58.
- 太田伸幸 (2010). 多面的競争心尺度作成の試み. 中部大学現代教育学部紀要, **2**, 57-65.
- 太田伸幸 (2011). 競争的な場面における目標志向性 (2)—競争の形態による目標志向性の比較—. 中部大学現代教育学部紀要, **3**, 55-65.
- 桜井茂男 (2009). 自ら学ぶ意欲の心理学. 有斐閣.
- 桜井茂男・高野清純 (1985). 内発的—外発的動機づけ尺度の開発. 筑波大学心理学研究, **7**, 43-54.
- Tomer, R., Slagter, H. A., Christian, B. T., Fox, A. S., King, C. R., Murai, D., Gluck, M. A., Davidson, R. J. (2014). Love to Win or Hate to Lose? Asymmetry of Dopamine D2 Receptor Binding Predicts Sensitivity to Reward versus Punishment. *Journal of Cognitive Neuroscience*, **26**(5), 1039-1048.
- 渡辺弘純・土井直子 (2007). 小学校児童における負けず嫌いの積極的意味を探る. 心理科学, **28**, 96-111.

(最終版令和3年9月14日受理)

“Hating to Lose” and Sport Activities

Tamotsu NISHIDA, Banjou SASAKI and Katsuro KITAMURA

Abstract

The phenomenon of “hating to lose” is becoming more meaningful to study academically in relation to sports. This study aimed to create a measurement scale for the “hating to lose” mentality and examined its reliability and validity. It also aimed to clarify the relationship between the “hating to lose” mentality and sports activities using the scale. A survey was conducted on 667 high school students in Japan (255 boys and 412 girls; average age 16.2 years). The survey included questions on attributes such as gender, grade, and experience of sports activities. Twenty-four items were used to understand the dislike of losing. Some questionnaire tests to measure multifaceted competitiveness, achievement motivation, and motivation for studying and exercise / sports were administered to the students.

As a result of the factor analysis, a “Hating to Lose” Scale (HLS) consisting of two subscales, “I hate to lose to myself” (eight items) and “I hate to lose to others” (eight items), was created. The HLS was at a satisfactory level of internal consistency of items and stability of measurement, and indicated the assumed relationship between multifaceted competitiveness, achievement motivation, and motivation for studying and exercise / sports. The reliability and validity of the HLS were confirmed as satisfied. In comparing the scores of the HLS based on the attributes, the “hating to lose” mentality for others is stronger in boys and upper-grade students. The students who belong to athletic club activities and students who are engaged in long-term sports activities were stronger in “hating to lose” for others and themselves. Alternatively, students who get regular class in the team have a stronger “hating to lose” mentality for both. However, there was no difference in the dislike for losing, even if the sports or grade levels were different. These results suggested that the “hating to lose” mentality influence sports activities, and conversely the experience of sports activities causes the formation of the “hating to lose” mentality or its related behavior. Finally, future issues related to the “hating to lose” mentality were presented.

Keywords: hating to lose, scale development, reliability, validity, sport activities